

地域を見つめ直す音楽教育実践の検討

— 岡山県玉野市内の公立小学校における即興演奏ワークショップを例に —

岡本 伸介 ・ 増田 建太*

本研究は、地域の文化や遺産、環境を念頭に置いた創造的な音楽教育によって、県内の人口減少に起因する課題の改善を図ることを目的としている。同時に、その創作教育を通じて、児童の柔軟な創造力や多様性を認める意識を育むこともねらっている。本研究において実践した取組は、現代音楽の表現を取り入れた即興演奏ワークショップである。

本稿では2024年に行った玉野市内の小学校におけるワークショップの内容を中心に論じる。本ワークショップは、児童が柔軟かつ多様な創作表現を実践する場となったが、児童と地域住民らがその地域の特色を認識する機会としては新たな課題を生んだ。地域と創造的な音楽教育を結んだ研究は実例が少なく、模索の段階であるため、本ワークショップを省みた上で今後の改善に繋げたい。

Keywords：音楽教育，地域教育，即興演奏，作曲，現代音楽

1. 玉野市の人口減少問題

2024年現在、岡山県における人口の減少が深刻化している。岡山県の人口は2005年（平成17年）の約196万人をピークに（岡山県総合政策局地方創生推進室 2021, 2）、2023年（令和5年）の時点で約184万人となっており（岡山県統計分析課人口統計班 2023, 1）、減少の一途をたどっている。本研究実践を取り組んでいる玉野市は、本県内において人口の減少が顕著な地域の一つであり¹⁾、本県の人口がピークに達した2005年の時点で約6.1万人（玉野市政策財政部総合政策課 2016, 1）、2023年の時点で約5.4万人となっている（玉野市市民生活部市民課 2024, 1）。つまり、玉野市は本県の人口の状況を上回る速度で減少が進行していることが明らかである。このような状況が改善できなければ、地域住民の高齢化に加え、児童生徒数の減少とそれに伴う小中学校の閉校、廃校に繋がり²⁾、市民の文化活動の減衰などを引き起こすことになるであろう。

人口減少の原因は、人口の地域外への流出である

社会減と出生率の低下による自然減となっており、地方の小規模自治体においては、前者の社会減が大きな問題となっている。その理由は、若い世代の進学や就職、そして生活の利便性を都市部へ求めた結果だと考えられる（厚生労働省 2015）。玉野市においては、「働く場所や暮らしやすい環境を整備することで、転出超過を抑制することが喫緊の課題」（玉野市政策財政部 2016, 1）として、2016年から人口流出問題の改善のために、「雇用創出」「移住・定住」「結婚・出産・子育て」「まちづくり・地域間連携」（同上, 6）に関する施策を講じているが、2021年の市の調査（玉野市政策財政部総合政策課 2021）においても流出を抑制しきれていないことが判明している³⁾。このことは、市の施策のみでは人口流出の抑制が困難であることを意味しており、地域社会全体で問題の解決に臨んでいく必要がある。

2. 芸術による地域活性化の取組

人口流出の抑制のためには、住民が地域の魅力を

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*富山大学学術研究部教育学系 930-8555 富山市五福3190

Music Education Practice Based on the Region: An Improvisation Workshop at a Public Elementary School in Tamano City, Okayama

Shinsuke OKAMOTO and Kenta MASUDA*

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Faculty of Education, University of Toyama, 3190 Gofuku, Toyama 930-8555

認識し、長くその地に留まることが重要である。さらには、地域外の人を呼び込める魅力を生み出し、転入者や帰省者を増やせることが理想的である。そこで、人口減少問題に直面するいくつかの地域では、地域の魅力を生み出す取り組みの一つとして、芸術による地域活性化を図っている。その代表的な例として、ここでは、地域芸術祭とその取組について述べる。

地域芸術祭は、芸術を通じて、過疎化などにより活力を失いつつある地域の活性化を図る取組であり、河野（2024）は次のように説明している。地域芸術祭は、地域独自の景観や地域が紡いできた文化と現代アートの融合を通じ、地域や年齢などの属性を超えたさまざまな人々の交流を生み出すことで地域に新たな魅力や視点をもたらし、交流人口を増やし、地域を活性化させていくことを目的として開催される。

地域芸術祭は、規模の大小は別として、様々な地域で開催されており⁴⁾、どの地域芸術祭においても「地域と現代芸術の融合」を通じて、「地域を活性化させる」という方法と目的は共有されている。本研究を实践する玉野市は「瀬戸内国際芸術祭」の開催地域の一つ⁵⁾になっており、それによって地域活性化に繋がる成果がもたらされている。

地域芸術祭の開催によって、地域には「経済効果」「新たなレガシーの創造」「地域コミュニティの再生」（河野 2024）の三種の成果がもたらされている。これら⁶⁾のうち、「地域コミュニティの再生」の内容には、「人が集える場所の増加」や「途絶えていた伝統の復活」、そして「市民の活動の活発化」などがある。地域芸術祭において、地域住民は芸術祭の運営に携わるだけでなく、作家と共同で作品制作を行うこともある。そのような作品は「市民参加型アート⁷⁾」と呼ばれ、地域の環境や文化を作品の背景に据え、地域住民と作家の意識を共有した上で制作されることがある。このように、これまで鑑賞者であった人々を制作の参加へ促し、社会とアートの多様な関係性をつくりだそうとする試みは「アートプロジェクト⁸⁾」と呼ばれる。地域芸術祭で展開されるアートプロジェクトは、地域住民と作家、そしてその鑑賞者（来場者）の活発な交流を生み出し、地域の活力の回復を促すことになる。また、地域性を念頭に置いた作品を協同で制作することで、地域の魅力を認識することにも繋がる。実際に、瀬戸内海の島々においては、芸術祭に関わるアートイベントをきっかけの一つとして、市民の活動が活性化し、さらに、人口の流入へ繋がったケースもいくつか見られる⁹⁾。

3. 研究の目的と方法

本研究は、地域住民、特に児童に、音楽活動を通して地域の環境や文化を深く認識してもらうことで、県内の人口減少に起因する課題の改善を図ることを目的としている。その方法として、過去の地域芸術祭がもたらした成果「地域コミュニティの再生」の内容の一つである「市民の活動の活発化」における市民参加型のアートプロジェクトを参考にした上で、地域の環境や文化に基づく創造的な音楽教育の実践を行う。本稿では、その一つである即興演奏ワークショップの実践を取り扱う。

本ワークショップは、岡山県玉野市内の公立小学校の協力のもと、2024年に開催した。また、本ワークショップの計画と運営は、玉野市を中心とする芸術活動を支援する団体「アーツ・プロジェクト地域の風実行委員会」の協力も受けた。そして、本ワークショップの目的と児童の取組を地域全体へ発信するために、地域住民へ見学の招待も、小学校を通じて行った。本ワークショップ終了後、参加児童を対象に、本研究の目的と関連する内容のアンケートを実施した。

本研究の実施内容とその結果の公表、個人情報の管理について、小学校校長と教頭に事前説明を行い、承諾を得た。それにあたり、アンケートは無記名かつ筆者らがワークショップから撤収した後に実施しており、本稿では児童の映った画像の一切を使用しない。また、2024年10月に行った本研究の口頭発表の際に使用した画像と映像には、モザイク処理を施した。

ワークショップでは、地域住民によって見守られる中で、参加した児童に地域の特色を認識してもらい、地域にさらなる愛着を抱いてもらうことを目指す。これらによって地域の繋がりを強めると同時に、地域住民にも地域の特色を再認識してもらうことが望まれる。そして、創造的な表現活動を通じて、児童の表現力や多様性を認める意識を育むことで、地域のさらなる活性化と抱えている問題の改善に繋がることが期待される。

4. ワークショップの概要

本研究の实践として、岡山県内の小学校第4学年から第6学年までの計26名の児童を対象にした即興演奏ワークショップを行った。ワークショップは、音響や表現の自由度が高い現代音楽を土台にした即興演奏スタイルを念頭に置きながら、地域の住民による参観と共に同小学校内で行った。

事前に当該地域の地理的構成要素の代表である「山」「学校」「海」のテーマで児童をグループ分け

ハサミで整形され、裏にマグネットが貼られた色画用紙に黒マジックで記入

例： さざなみ

貼付素材 (ワードモチーフ) + マーカー (ドローイング)

↓

黒板
(模造紙)

山 グループ	
学校 グループ	
海 グループ	

スタート! → → → → → → → → 終わり!

|||||▶

左から右への移動を基本的とする

演奏の現在位置を示す棒 (演奏棒)

しておき、児童は各テーマに関連した「音が出るもの」を持参した。そして当日のワークショップでは、楽譜づくりを含めたデモンストレーションを講師が行った上で児童がグループワークにおいて即興演奏のための楽譜制作を実施し、楽譜を見ながら即興演奏による合奏を行った（表1）。

– 69 –

における当事者意識を持てるようにするために、必ず全員がドローイングを行うものとし、楽譜作成作業に全員が加担するようにした。

以上の作業を経て出来上がった楽譜(図2)に従って、演奏へと移った。演奏は、楽譜を見ながらその場で判断して即興的に表現したが、楽譜を読む位置を示す棒を図1のように動かすことで、全体の演奏と読譜のタイミングを合わせた。本稿では、この棒のことを「演奏棒」と呼ぶことにする。なお、演奏の配置は、地域の地理的關係に因んだものとし、事前に地図で示し児童と認識を共有した。

楽器は、児童が持参したものに加えて、運営側が用意したものが使われた(表2)。これらの楽器を机に並べておき、いつでも即興的に手に取れるようにした。楽器の活用方法を吟味する時間を設けなかったため、演奏の実践は直感的且つ即興的なものである。

5. 考察

(1) ワークショップ考

ワークショップの状況を整理する要素には、楽譜作成、演奏、そして地域のアイデンティティの共有

がある。

児童が作った楽譜は、楽曲の構造を考えることで位置関係が吟味されたワードモチーフと、直感的且つ即興的に表現されたドローイングで構成されている。楽譜作成行為においては、ワードモチーフに関わる作業が言語的活動として、ドローイングが非言語的活動として機能する。なお、美術と音楽を結びつけた実践については、教科によって両者が切り離される前の幼児教育では盛んに行われている。しかし、「保育者が考える「造×音」表現の実践イメージにおいて、造形活動が活動の出発点となることは稀であり、一般的には、「音楽から着想を得て想像した絵を描く」というように、活動の到達点として造形を位置付けることが多い」(高橋 2017, 294)とされている。これについて高橋は「子どもに対して造形活動を先に提示した後、音楽活動へと活動を展開することは、保育者にとって実践イメージを持つのが難しく、実現可能性の低い内容であると考えられる」(同上, 293-294)と述べている。この点において、本実践の場合は現代音楽という音楽スタイルを選択したことが実現可能性を高めたと言える。現代音楽は音楽表現上の一般的制約を少なくするこ



図2 児童が完成させた楽譜

表2 ワークショップで使用した楽器一覧

グループ	使用されたもの	主な奏法	備考
山	落ち葉	振る	金属の入れ物やたらいに入れておいた
	石	打ち合わせる	
	地域の木の枝(竹, 笹, 桎など)	振る	
学校	定規	打ち合わせる, 机に打ち付ける	
	鉛筆	打ち合わせる, 机に打ち付ける	
	ペン	打ち合わせる, スイッチを押す	
	ボール	床に打ち付ける	バスケットボール, バレーボール
	ペンケース	開閉する, 打ち合わせる	
海	水(ペットボトル容器入)	振る	
	砂(ペットボトル容器入)	振る	会場近隣の海で採取
	貝殻(ペットボトル容器入)	振る	会場近隣の海で採取
	貝殻(そのまま)	打ち合わせる	会場近隣の海で採取
	豆類(ペットボトル容器入)	振る	
	流木	打ち合わせる	会場近隣の海で採取

とができ、多様性を許容できるからである。また、大人側が持つ実践イメージは当然ながら子ども側の活動における実現可能性に関わっている。本実践の場合は、楽譜作成という一連の造形的活動の中に言語的コミュニケーションを内在させ、造形物の中にワードモチーフという言語的概念を含有させた。これによって活動の具体性が言語を通して強化される。高橋の報告ケースにおける幼児よりも本実践対象者が既に言語的にある程度成長した段階にあることを鑑みると、本実践は実現性のある活動と考えることができよう。

同じ楽譜を使って何度も演奏が行われたことから、演奏には直感的な即興と作曲作品の再現の両面の要素が含まれていたと考えられる。しかし、一般論として即興演奏のスタイルによって再現性の程度には幅があるため、本実践では演奏が不確定な行為なのか、或いは再現行為なのかということに関する定義づけを避けた。また、演奏棒は合奏を整理するための工夫として重要であった。第一に、視線を誘導することで楽譜を見る箇所を同期させることができた。第二に、演奏棒を左から右へとゆっくり移動させるだけでなく、停止や逆行なども含めることで、演奏の面白さをゲーム感覚で味わえたと考えられる。

音響は大きな音量の混沌とした状況であったが、演奏自体は、ワードモチーフに従った変化や移り変わりが明確に見られた。これは楽譜から言語的情報を読み取り、そこから思考を広げ音楽表現へと移すことができたことを意味すると考えられる。

また、ドローイングによって描かれたものが演奏に反映されるケースもあり、それは音楽的に機能したと考えられる。ただし、それが具体的にどのような捉えられたかということについては、今回は詳細な調査には至っていない。なお、ドローイングと音楽表現の関係性に関する先行研究が取り扱った事例として音楽を聴きながら行うドローイングがある。

幼児を対象とした実践（赤崎 2008）や、小学生を対象とした実践（家崎 2019）があり、描かれた絵の様相は異なるものの、いずれもリアルタイムで得られる音響やそのイメージと関連した内容であった。一方で、本実践のドローイングに至るプロセスの場合は、実際の聴覚的な情報を前提としていない点が、それらの実践と異なっている。

地域のアイデンティティについては、演奏に使用したモノや、配置などを通した共有を事前に想定した。楽譜作成において具体的な地域の要素を視覚化し、演奏によってそれが音楽活動として表現される。このときに、地域の特色を認識し、地域の取組として価値を見出すという仕組みになると仮定した（図3）。

結果としては、参加した児童による発言では、地域に因んだイメージと関連した音楽の表現や演奏行為に関する言及が複数あった。一方で、観客（地域住民）から寄せられた声においては、音楽の新規性に関する言及があったが、演奏に関する具体的な言及はなかった。これは、音楽を表現する過程や体験から捉えているのか、あるいは結果から捉えているのか、という違いの表れであると推測されるが、それぞれの立場から音楽活動に意欲的に対峙していたことが窺える。

地域に対する愛着については、「社会的環境の整備、すなわち、住民間の密なネットワーク形成が肝要である」（引地ほか 2009, 108）とされている。本実践の場合は、合奏という音楽活動の場が表現する上での音楽的「環境」であり、尚且つ合奏そのものが音楽的ネットワークである。つまり、地域に対する愛着が子ども間で形成できる可能性をもった状況であったと推測できる。更には、「音を奏でている当事者以外の周辺的な参加も音楽する行為に従事していると捉える」（壽谷 2024, 31）ミュージッキング¹⁰の考え方で本実践を捉えれば、参観した地域住民も音楽を通した共同体の一部であったと考え

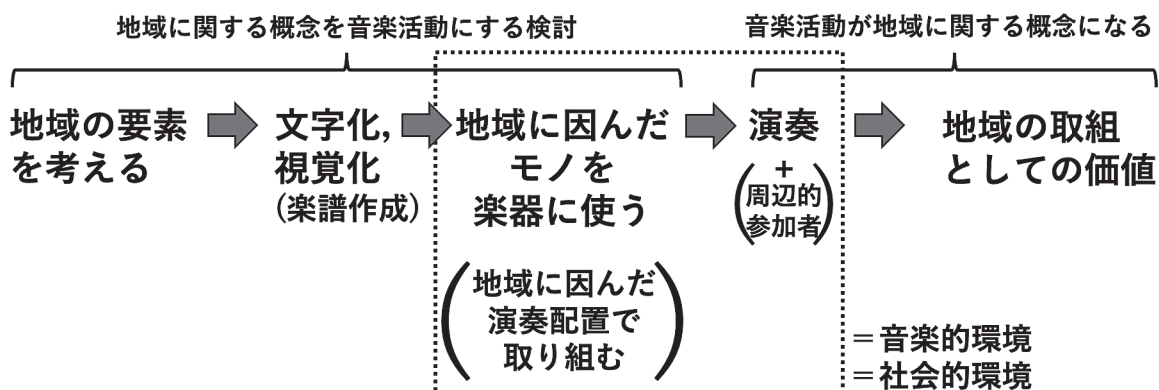


図3 想定された本ワークショップと地域の関係性

表3 選択式によるアンケートの内容とその意図

質問内容	質問意図
Q1. 学年 Q2. 担当グループ	集計上の理由
Q3. 今までピアノ教室などで、音楽を学んだことはありますか。 選択肢：ある、ない	他の質問と複合的に考察するため
Q4. 様々な演奏方法を使って、風景を表現できましたか。 選択肢：できた、難しかった、分からない	地域の特色に対する意識の確認
Q5. 自信をもって、演奏することができましたか。 選択肢：できた、難しかった、分からない	表現の探求における達成度の確認
Q6. 自分でしか表現できない音をみつけられましたか。 選択肢：見つけられた、難しかった、分からない	表現の探求における達成度の確認
Q7. まわりの人たちの面白い表現や、 良い点を見つけることができましたか。 選択肢：できた、難しかった、分からない	多様性に対する認識状況の把握
Q8. 何に気をつけて演奏しましたか。(複数回答可) 選択肢：a.周りの演奏者の音や動き、b.指揮者の動き、 c.客席の様子、d.道具の使い方、e.楽譜の棒の位置、 f.表現する風景の様子、g.その他	上記確認事項の複合 今後のワークショップ進行の参考
Q9. 今回のワークショップは楽しかったですか。 選択肢：楽しかった、楽しなかった、分からない	本取組に対する児童からの評価

※太字は本取組において特に重要な確認項目

表4 児童26名によるアンケートの集計結果

Q3. 今までピアノ教室などで、音楽を学んだことはありますか？	学年・人数	グループ	ある	ない
	第4学年 12名	海	2	2
		山	1	2
		学校	4	1
	第5学年 5名	海	1	
		山		2
		学校	2	
第6学年 9名	海	2	1	
	山		4	
	学校		2	
合計			12	14

Q6. 自分でしか表現できない音をみつけられましたか。	学年・人数	グループ	見つけられた	難しかった	分からない
	第4学年 12名	海	2	1	1
		山	2	1	
		学校	2	2	1
	第5学年 5名	海	1		
		山		1	1
		学校	1	1	
第6学年 9名	海	1		2	
	山	1	1	2	
	学校	1	1		
合計			11	8	7

Q4. 様々な演奏方法を使って、風景を表現できましたか。	学年・人数	グループ	できた	難しかった	分からない
	第4学年 12名	海	4		
		山	3		
		学校	1	3	1
	第5学年 5名	海	1		
		山		2	
		学校	1	1	
第6学年 9名	海		3		
	山		2	2	
	学校	1	1		
合計			11	12	3

Q7. まわりの人たちの面白い表現や、良い点を見つけることができましたか。	学年・人数	グループ	できた	難しかった	分からない
	第4学年 12名	海	3	1	
		山	2		1
		学校	4	1	
	第5学年 5名	海	1		
		山		1	1
		学校	2		
第6学年 9名	海	2	1		
	山	2		2	
	学校	2			
合計			18	4	4

Q5. 自信をもって、演奏することができましたか。	学年・人数	グループ	できた	難しかった	分からない
	第4学年 12名	海	4		
		山	3		
		学校	2	2	1
	第5学年 5名	海	1		
		山		1	1
		学校	1	1	
第6学年 9名	海	2	1		
	山	2		2	
	学校	1	1		
合計			16	6	4

Q9. 今回のワークショップは楽しかったですか。	学年・人数	グループ	楽しかった	楽しなかった	分からない
	第4学年 12名	海	4		
		山	3		
		学校	5		
	第5学年 5名	海	1		
		山	1		1
		学校	1		1
第6学年 9名	海	3			
	山	3		1	
	学校	2			
合計			23	0	3

Q8. 何に気をつけて演奏しましたか。 (複数回答可)	学年・人数	グループ	a.周りの演奏	b.指揮者の音	c.客席の様子	d.道具の使い	e.楽譜の棒の	f.表現する風	g.その他 (自由記述)
	第4学年 12名	海	1	3	1	3	4	3	
		山				3	3		1 音のならしかた
		学校	1	1		3	2	1	
	第5学年 5名	海	1	1		1	1	1	
		山				2			
		学校	1					1	
第6学年 9名	海		1		2	1	1		
	山	1	1		2	1	2	1 どうやって音を出すか	
	学校	1			2				
合計			6	7	1	18	12	9	2

られる。なお、先行研究では「「地域への愛着」形成を目標とするならば、子どもが肯定的な印象をもてるような地域の人々と出会わせることはその手立てとして有効な手段の一つとなる」（山本ほか2016, 25）と立証されている。その中で、本実践は音楽であるからこそ成立する手立てであったと推測される。

（2）アンケートの結果と見出された課題

ここでは、ワークショップ後に行ったアンケートの結果に基づく考察と今後の課題について述べる。

ワークショップ終了後、参加した児童26名を対象に、自身の取組に対する評価を記入するアンケートを無記名で実施した。アンケートの評価項目は表3の通りであり、Q4からQ7の設問は「地域の特色に対する認識」「表現力」「多様性の認識」という、本ワークショップにおいて児童の伸ばしたい力の達成度を確認する内容となっている。また、Q8はこれら達成度の複合的な確認と、今後のワークショップ進行の改善に役立てるための内容となっている。Q9は本ワークショップに対する児童からの評価であり、ワークショップの内容の満足度を調査するための項目である。Q3は他の設問の回答結果と複合的に調査するために設けた設問である。これらの設問に対する回答の集計結果を表4に掲載した。

まず、地域の特色に対する意識の確認について考察する。本ワークショップを通して、地域の環境や文化といった魅力を児童に認識してもらうことは、地域が抱える問題の改善へ繋げるために、最も重視すべき内容である。この内容については、Q4の回答とQ8の選択肢の一つ「表現する風景の様子」の選択率から達成度を判断する。Q4について、「できた」と回答した児童は11名、「難しかった」「分からない」と回答した児童は合計で15名であった。Q8について、該当する回答を選んだ児童は9名であった。両設問の回答結果から、全参加者のうち3.5から4割程度の児童に地域の特色へ意識を向けてもらえたようであり、筆者らの想定を下回る結果となった。このような結果となった原因は、このワークショップにおいて、児童たちに地域の特色を認識してもらうための準備が、不足していたことにあると考えている。地域の特色と音を関連付けられる可能性がある手段の一つとしては、例えば、「サウンドウォーク（音の散歩）¹¹⁾」の実施が挙げられる。2024年12月に開催予定の第2回ワークショップに向けてのサウンドウォークの実施は実現できなかったが、小学校の協力のもと、地域学習の授業の中で児童に「地域から連想する音を考えてもらう」取組

を実施してもらうこととなっている。

次に、表現の探求の確認について考察する。この内容については、Q5とQ6の回答、そしてQ8の選択肢の一つ「道具の使い方」の選択率から判断する。Q5について、「できた」と回答した児童は16名、「難しかった」「分からない」と回答した児童は合計で10名であり、全体の6割強が表現を探求できたと感じたようである。この達成度と近い結果が得られた設問がQ8であり、該当する回答を18名、全体の7割弱が選択している。しかし、Q6について、「できた」と回答した児童は11名、「難しかった」「分からない」と回答した児童は合計で16名であり、この設問に対しては全体の4割強に留まった。これらの結果から、「奏法の探求を行い、演奏自体はしっかりと行えたが、独自の表現を見つけるには至らなかった」という状況が推察される。このような結果となった原因は、児童らが表現したい内容を探求する時間が不足していたからであると考えられる。今後のワークショップでは、児童が道具の奏法を探求する時間を十分に設け、状況次第では、講師による奏法の提案などの補助を行う必要があると思われる。

続いて、多様性の認識の確認について考察する。この内容についてはQ7の回答とQ8の選択肢の一つ「周りの演奏者の音や動き」の選択率から判断する。Q7について、「できた」と回答した児童は18名、「難しかった」「分からない」と回答した児童は合計で8名であり、全体の7割弱が周りの児童の美点を認識できたと感じたようである。ただし、Q8の該当する回答を選択した児童は6名、全体の2割強に留まっているため、周りの様子を自身へ反映させた児童は非常に少なかった。このことについては、おそらく、演奏の最中には周囲を意識することはあまりなく、演奏終了後（またはアンケートの回答中）にようやく、周囲の様子を思い起こしたという児童の思考が推測される。したがって、周囲の多様性は認識しつつも、それらを自身の演奏へ何らかの形で反映させるまでには至らなかったようである。このような結果となった原因も、奏法の探求時間の不足に由来する、演奏時のゆとりの無さにあると考えられ、児童が道具の奏法を探求する時間を十分に設けることが重要になるであろう。

最後に、本ワークショップへの児童からの評価についてである。この内容についてはQ9の回答結果から判断する。これについて、「楽しかった」と回答した児童は23名、全体の9割弱から好意的な反応を得られた。ただし、「楽しくなかった」「分からない」と回答した児童が3名いたことは事実であり、

全員の児童がこのようなワークショップに好意的なわけではないことは、念頭に置く必要がある。また、Q3の回答結果と照らし合わせたことで、否定的な回答をした児童の全員が、過去に、学外での音楽学習を経験していなかったことが明らかとなった。したがって、これらの児童が音楽表現の活動に対して苦手意識を持っている可能性がある。このような児童も楽しんで取り組めるように、ワークショップの進行方法を改善していく必要があると考えられる。

6. 地域住民の感想

本ワークショップの実施後、地域住民から次のような感想が岡本へ直接届いた。「子どもたちが楽しそうに取り組んでいる様子が見られて、こちらも嬉しかった。楽しかった。」「今の音楽の捉え方や作り方を知ることができて興味深かった。」「(ワークショップの開催日と)同時期に、似たような即興演奏をラジオで聴く機会があり、驚いた。」「様々な音楽の在り方を知ることができて、良い機会だった。」

地域住民の感想は、児童の取り組み姿を見られた喜びや、現代の音楽表現の多様性・新規性についての内容が中心であった。それに対して、地域と音楽を関係づけた具体的な感想は得られなかった。したがって、地域の特色を住民にも改めて認識してもらうという本研究の目標については、課題が残る結果となった。そのほかの地域住民の声として、「マイクが無いので、講師の説明が聞こえにくかった。」といった感想もあった。今後は、ワークショップの意図を住民へ丁寧に伝えるよう工夫する必要がある。

7. 終わりに

本研究に関わる一連の取組を実践したことで、地域の特色の認識を促し、地域の活性化へ繋げていくことへの課題が明らかになった。本研究のような地域性を考慮した創作的音楽教育は類例が少なく、実践は手探りの状態であった。なお、過去に、小学校音楽科教育の「音楽づくり」として、地域性を考慮した取組を実践した例¹²⁾もあるが、それらは地域の活性化を最重要課題とする本研究とは異なり、あくまで音楽科教育を充実させるための手段として、地域の文化を活用した内容だと言える。本研究をさらに充実した内容とするためには、市民参加型のアートプロジェクトにおける方法論の積極的な参照が重要になるであろう。

地方とそこで生活する人々の未来のためにも、本研究に長期的に取り組み、地域のことを考え、創造力を持てる人間を増やしていくことに繋げていきたい。

注

- 1) 岡山県において人口の減少が顕著な地域は、玉野市以外に笠岡市、井原市、高梁市、新見市、備前市、真庭市、美作市、浅口市、和気町、矢掛町、新庄村、鏡野町、久米南町、美咲町、吉備中央町が挙げられる(岡山県総合政策局地方創生推進室 2021, 11)。
- 2) 実際に、岡本の出身校が人口の減少を理由に、2024年度をもって閉校することが決まっている。
- 3) ただし、「公共交通運営事業利用者数」など、2016年時点における将来の目標値を上回る成果を上げた施策があることは考慮する必要がある(玉野市政策財政部総合政策課 2021)。
- 4) 筆者らが過去に関わった地域芸術祭は、大阪府柏原市の「柏原ビエンナーレ」と三重県伊賀市の「風と土のふれあい芸術祭」(岡本のみ)がある。広く知られている地域芸術祭と比較するとどちらも小規模ではあるが、「地域と現代芸術の融合」を通じて「地域を活性化させる」という目的と方法は共有されている。
- 5) 瀬戸内国際芸術祭は、香川県と岡山県に属する島々と瀬戸内海沿岸地域を会場とする地域芸術祭であり、玉野市は宇野港周辺地域が第2回(2013年開催)から会場となっている。
- 6) 「経済効果」については、2022年会期の香川県への経済波及効果が103億円にのぼると推計されている(日本銀行高松支店・瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2023, 1)。岡山県への経済効果については数値として明らかにされていないが、芸術祭の玄関口の一つである玉野市のJR宇野駅の利用者数は、芸術祭開催に伴って増加している(玉野市政策財政部総合政策課 2018, 5)。「新たなレガシーの創造」についての詳細は河野(2024)を参照すること。
- 7) 「『作品を創造する作家』と『作品を享受する鑑賞者』という近代的な役割分担に対する疑問」(中山 2024)から、作家と鑑賞者が協同で作品を制作する「参加型アート」が1990年代ごろから見られるようになった。作品制作において、作家と地域住民が中心となっている作品を「市民参加型アート」と呼び、参加者が「市民」であることを強調している。
- 8) 「アートプロジェクトは一言で簡単に定義しにくい要素を持っているが、「社会とアートの多様な関係をつくりだそうとしていること」「表現活動のさまざまな場面への参加・交流をつくりだそうとしていること」のふたつの要素が、アートを鑑賞中心の世界から広い意味を持つ「プロジェクト

ト」にしている」(橋本 1997, 126)

- 9) 直島では人々の集える店舗が増加し、男木島では移住促進の活動が活発化、さらには休校になっていた小学校や保育所が再開された(河野 2024)。ただし、アートイベントは地域活性化の要因の一つであり、様々な要因が複合した結果得られた成果であることは念頭に置く必要がある。
- 10) ミュージッキング Musicking とは、クリストファー・スモール Christopher Small による造語であり、「音楽する」とは、どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり、これには演奏することも聴くことも、リハーサルや練習も、パフォーマンスのための素材を提供すること(つまり作曲)も、ダンスも含まれる」(スモール 2011, 30-31)とされている。
- 11) 「音の散歩」とは、ガイドとしてスコアを用い、特定の地域のサウンドスケープを探索することである。スコアは、聴者がそこに書かれた道を辿っていくうちに、聞き慣れない音や周囲の音に注意を向けていくように仕組んだ地図でできている。」(シェーファー 2006, 429)シェーファーのこの定義について、次の石出(2014, 48)による解釈が分かりやすい。「サウンドウォークとは、引率者によってデザインされた音の時空間を、参加随行者たちが〈たどる〉ことにより生起する音体験であると言える。」
- 12) 地域文化を活かした取組の例として、山崎・中島(2019)による熊本民謡「おてもやん」に基づく音楽づくりの実践が挙げられる。また、中学校音楽科における「創作」分野の例では、広島県竹原市の地域資源を活かした旋律創作(石原 2022)が挙げられる。

参考文献

- 赤崎節子(2009)「幼児が心わきたたせ学び合いながら育っていくための実践—4歳児の生活の中の音楽と描画の統合実践—」『エデュケア』第29号, 21-30
- 家崎萌(2019)「音楽を通した造形活動による異文化交流の共同授業について—プラハ公立小学校での授業「二つのメロディー」を中心に—」『美術教育学研究』第51巻, 第1号, 17-24
- 石出和也(2014)「音楽学習としてのサウンドウォーク」『弘前大学教育学部紀要』第111号, 47-54
- 石原朋枝(2022)『地域資源を活用して地域をテーマにした旋律をつくろう』竹原市立竹原中学校, キャリア教育 https://www.takehara-takehara-j-hiroshima-c.ed.jp/70_career/t3_2music_sidou.pdf
- (参照日 2024年11月15日)
- 河野まゆ子(2024)『地域芸術祭が向かう未来』株式会社JTB総合研究所 <https://www.tourism.jp/tourism-database/column/2024/04/regional-art-festival/> (参照日 2024年5月27日)
- シェーファー, R. マリー(2006)『世界の調律—サウンドスケープとはなにか—』鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳, 平凡社
- 壽谷静香(2024)「音楽コミュニティの形成を見据えたミュージッキング活動—参加協働型アクションリサーチの事例—」『教育学研究論集』第19号, 31-34
- スモール, クリストファー(2011)『ミュージッキング—音楽は〈行為〉である—』野澤豊一・西島千尋訳, 水声社
- 高橋慧(2017)「造形と音楽を結び付けた子どもの表現活動に関する保育者の実践案と量的分析に基づく現状把握」『美術教育学』第38号, 283-295
- 中山亜美(2024)『参加型アート Participatory Art』Artscape アートスケープ <https://artscape.jp/artword/5991/> (参照日 2024年11月10日)
- 橋本敏子(1997)『地域の力とアートエネルギー』学陽書房
- 引地博之・青木俊明・大淵憲一(2009)「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—」『土木学会論文集D』第65巻, 第2号, 101-110
- 溝口希久生(2022)「教科専門科の地域文化を素材にした音楽づくりの表現過程で獲得する概念」『和歌山信愛大学教育学部紀要』第3巻, 73-80
- 山崎浩隆・中島千晴(2019)「創作活動によって郷土の音楽のよさを実感させる授業の開発—小学5年「おてもやん」の実践を通して—」『熊本大学教育実践研究』第36号, 35-42
- 山本銀兵・加納誠司(2016)「「地域への愛着」形成過程に関する一考察」『愛知教育大学教職キャリアアセンター紀要』第1号, 17-25
- (団体資料)
- 岡山県総合政策局地方創生推進室(2021)『岡山県人口ビジョン改訂版』<https://www.pref.okayama.jp/uploaded/attachment/289345.pdf> (参照日 2024年11月9日)
- 岡山県統計分析課人口統計班(2023)『岡山県の人口(岡山県毎月流動人口調査の結果概要)』https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/891622_8494971_misc.pdf (参照日 2024年11月10日)

厚生労働省（2015）『平成27年版厚生労働白書—人口減少を考える—』<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/backdata/01-01-03-134.html>（参照日2024年11月10日）

瀬戸内国際芸術祭実行委員会（2022）『瀬戸内国際芸術祭2022総括報告』<https://setouchi-artfest.jp/files/about/archive/report2022.pdf>（参照日2024年5月23日）

玉野市市民生活部市民課（2024）『令和5年度玉野市住民基本台帳人口・世帯動態について』<https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/26638.pdf>（参照日2024年11月10日）

玉野市政策財政部総合政策課（2016）『たまの長期人口ビジョンたまの創生総合戦略』<https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/7206.pdf>（参照日2024年9月28日）

———（2018）『たまの版生涯活躍のまち基本計

画～たまの版CCRseaプロジェクト』<https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/6606.pdf>（参照日2024年11月10日）

———（2021）『たまの長期人口ビジョン第2期たまの創生総合戦略（令和2年度改定版）』<https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/13839.pdf>（参照日2024年10月16日）

日本銀行高松支店・瀬戸内国際芸術祭実行委員会（2023）『「瀬戸内国際芸術祭2022」開催に伴う経済波及効果』https://www3.boj.or.jp/takamatsu/y_document/econo-pdf/notice/repo_200204.pdf（参照日2024年11月10日）

【付記】

本稿は、2024年10月20日（日）日本音楽教育学会第55回大会にて行った口頭発表の内容を加筆・再構成したものである。